巻頭特集

平井伸治 鳥取県知事 インタビュー

鳥取から開く令和の新時代

「スタバはないけれど日本一のスナバがある」は、いまや全国に知られる名キャッチコピー。平井伸治知事が放った言葉は、鳥取の存在感を一気にあげました。県民の期待を胸に、今後、鳥取はどのような挑戦をしていくのでしょう。四選を果たした知事に詳しく伺いました。

Profile

昭和36年9月17日生まれ。東京大学法学部卒業。自治省、兵庫県、福井県で勤務し、その間、平成7年には米国カリフォルニア大学バークレー校政府制度研究所客員研究員となる。平成11年鳥取県総務部長、平成13年に全国最年少（当時）で鳥取県副知事に就き、平成19年鳥取県知事初当選。平成23年再選、平成27年3選、そして平成31年4選。趣味は家族のための蕎麦打ち、水泳

―元号が変わり、新たな時代を迎えました。知事におかれましては、四期目にどのような決意、展望をおもちでしょうか

知事 ― いよいよ「令和」の時代が始まりました。さまざまな立場の人が同じコミュニティーで支えながら暮らす鳥取では、幅広い階層の大々による歌を編纂した『万葉集』の時代のように、人と人のネットワークが自然と育まれてきました。鳥取で生まれた新しい命が美しい自然に囲まれてすくすくと育ち、高齢者は生き生きと過ごしています。一人ひとりが明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることのできる、そうした日本でありたいとの願いが込められた「令和」の新しい価値観は、まさに私たち自身がふるさと鳥取で温めてきたものだと思っています。ここ鳥取から令和の世を切り開き、大都会では絶対にかなうことのない暮らしを、どのように築いていくか。これからの四年間のテーマとして、産業界、市町村、市民団体と連携しながら挑戦していきます。

―移住者や外国人観光客増加に見られるとおり、鳥取の魅力に興味をもつ人が増えてきました

知事 ― 一期目の就任時に比べ、外国からの宿泊客は十二倍に増えました。これは、地域をあげて進めた大変な努力の成果です。例えば、鳥取砂丘の活用方法や大山でのフィールドアスレチック、自転車を使ったアクティビティなどを県外にPRしています。近年は『名探偵コナン』のふるさととして知られ、「青山剛昌ふるさと館」には世界中から人が訪れるようになりました。

移住に関していえば、平成二十九年度は二千百二十七人の移住者がありました。鳥取は、平成十九年に人口が六十万人を下回りました。これは県民にとって、非常にショッキングなできごとであり、策を講じなければ減少の一途をたどるという危機的状況に面したのです。そこで鳥取にしかない、鳥取らしい魅力を全面に出したPRをしていこうと決めました。自然の恵みや人の絆を生かしていけば、決して都会に負けない魅力もあると自信があったのです。

移住は一大決心が必要です。空き家があれば住めるわけではありません。民家修繕に代表される県の助成のほか、移住者の立場で、または移住経験者が一緒になってアドバイスをするネットワークが各地域で独自に進化しています。移住対策の水準が高まり、結果につながりました。

世界に目を向ける自治体が多いなか、鳥取には地元の人を巻き込んで地域おこし、産業おこしをしようという雰囲気があります。人と人のつながりにこそ、鳥取の勝機があると思うのです。人の絆が機能しているなと感じたのは、平成二十八年十月に発生した鳥取県中部地震でした。捜索しても見つからなかった行方不明の高齢者を、翌朝早くから地元のみなさんで捜し無事に発見。朝の六時半ごろ、私に「発見し、息があります！」と電話があったのを鮮明に覚えています。「鳥取ってすごい。こうやって地元の人の絆で人の命が助かるんだ」と、大阪からの移住者は感激していたと聞きました。これが我々の強みなのです。

―県内のインフラ整備が進み、人が集まり産業が発展する土台ができています

知事 ― 四月に豪華客船「クイーン・エリザベス」が境港に寄港しました。今年は五十回以上の停泊が予定されています。境港は韓国・釜山に近く、日本海を航海する国際船にとって絶好のロケーション。境港管理組合は「アジア・クルーズ・ターミナル協会」に加盟し、世界のシンジケートに入り込んでいます。現在、外港竹内南地区貨客船ターミナル整備事業は完成を約一年後に控え、世界の船会社を相手に誘致を図っている段階です。

そして、いよいよ五月十二日に鳥取西道路鳥取西IC～青谷IC間が開通しました。北条バイパスを除き、山陰道が全てつながりました。米子自動車道、鳥取自動車道をあわせて考えると全国の交通ネットワークに鳥取県全体が組み込まれることになりました。これは我々が長年、夢に見てきたこと。十年前には三割程度だった高速道路整備率が、いまは八割にまで上がりました。関西からの観光客増加や、産業誘致にも期待が膨らみます。通勤にも便利で、いままでになかった鳥取・山陰の姿がうまれはじめている印象です。

―今後解決していく鳥取の課題を教えてください

知事 ― 移住者が増える一方、県外へ出る若者も増えています。進学を機に県外に出ると、どうしても鳥取との接点がなくなってしまい、「地元には就職場所がないのでは？」という不安がうまれます。インターンシップや企業とタイアップした就職支援などを検討しています。また、最近は県外から鳥取を応援してくれる人が多くいます。観光よりは深く関わるけれど、移住の一歩手前という方法です。週末のボランティアなどで関係人口を増やしていきたい。用瀬には大学生が中心になって週末住人のプロジェクトがあります。鳥取県は東京、大阪に「とっとり歓迎案内所ウェルカニ」をつくり、鳥取との多様な関わり方を紹介しています。

―知事のダジャレで鳥取がより知られるようになっています。今後の戦略はありますか

知事 ― 「スタバはないけれど日本一のスナバがある」。これが全国で知られることとなりました。「全国ニュースで扱ってもらえるなら、とことん鳥取を宣伝しよう」と発した言葉です。鳥取では放送されなかったため「県民の知らないところで、鳥取県が全国で有名になっていた」なんて、驚きの現象がおこりました。しかし、面白おかしく話すと全国メディアが取り上げてくれると、よく分かりました。それまでは農産物などでも味や効能について発信してきましたが、ひと工夫するようにしています。たとえば、「新甘泉梨（しんかんせんなし）」では「鳥取はいつまでたっても新幹線ができないので、とりあえず梨でつくりました」、「松葉ガニ」では「お金はないけど蟹はある！蟹の王国、鳥取県へウェルカニ～!!」といったもの。こちらの方がよっぽど、印象に残るんですね。どんなに良いものでも、なかなか全国に知られないという悔しい思いがありましたから、ダジャレにして、ほんの少し自虐的に発信すると、「最近、鳥取が面白い」「遊びにいってみようか」と興味をもってもらえます。いまも、鳥取らしさを含めた田舎型の売り込み方法をブラッシュアップしています。

鳥取にはチャンスがあると思っています。全国的にも注目されるようになってきました。次の世代、さらに次の世代に、どんな暮らしをプレゼントできるか。令和のはじめに、改めて決意を強めています。

―ありがとうございました

鳥取の魅力を発信し関わり方を提案する「とっとり歓迎案内所 ウェルカニ」開設式（鳥取県東京本部内）

災害発生時には多様な機能を発揮し、安心新時代を支える鳥取県立中央病院新病棟

境港竹内南地区貨客船ターミナルが、今後、さらに鳥取の可能性を引き出します

山陰道鳥取西道路全線開通記念式典。交通網の充実は、産業の発展に大きな影響を与えます

（右）平井伸治鳥取県知事
（左）中広　遠藤千明

インタビュー・文／遠藤千明　写真提供／鳥取県　写真／山田真実　デザイン／松野秀稔